

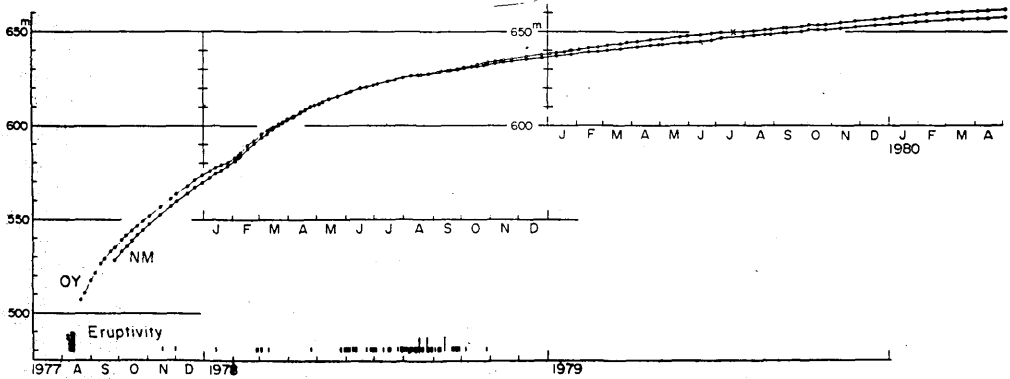
計器観測による有珠山頂火口原の 地殻変動(1980年1月~4月)*

北海道大学理学部有珠火山観測所

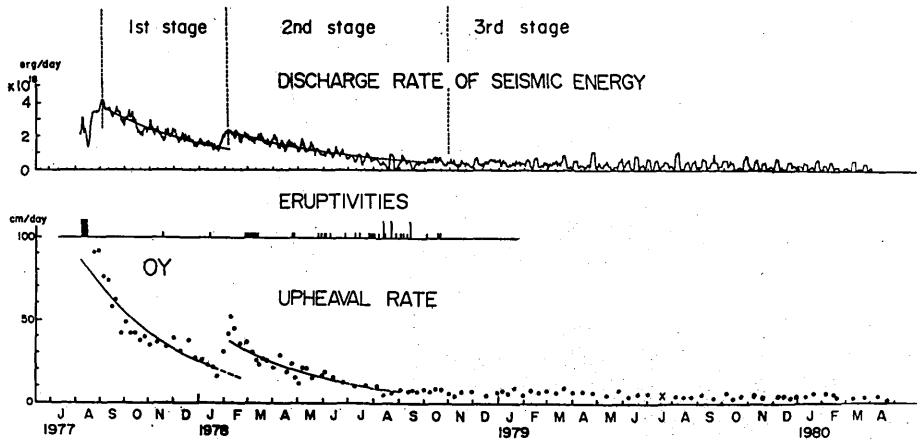
既報¹⁾に引き続いて、有珠山の南々東約8 Kmに位置する伊達市役所屋上から、火口原内の目標点(新山・おがり山)の高度角を測定して、これらの高度変化を追跡した結果を報告する。なお、小有珠・大有珠の高度変化は前報とほとんど変わらないので、今回は省略する。

火口原内新山及びおがり山

現在までの結果を第1図に示す。両者ともまだ隆起は続いている。いま、おがり山の隆起速度と毎日の放出地震エネルギー(札幌管区気象台による)とをならべて示すと、第2図のようになる。



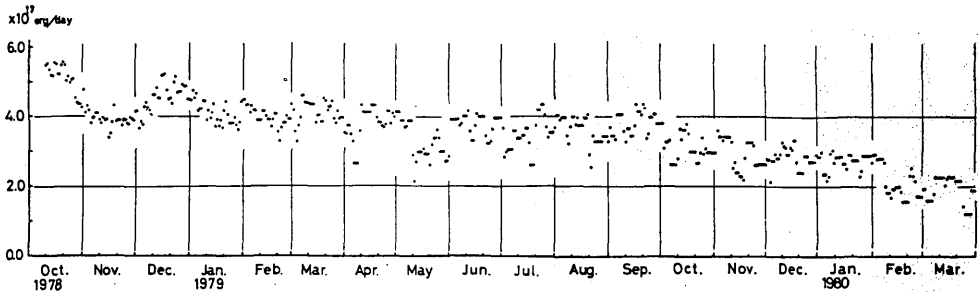
第1図 新山(NM)およびおがり山(OY)の
高度変化, ×印は崩落を示す。



第2図 毎日の放出地震エネルギー(札幌管区気
象台)およびおがり山の隆起速度

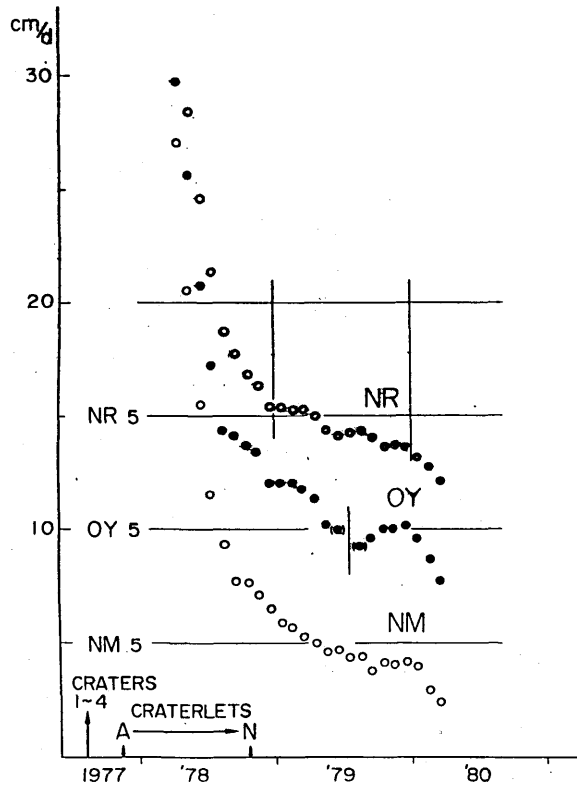
* Received May 22, 1980

噴火開始（1977年8月7日）から同年8月末頃までは“噴火期”，次いで1978年1月末頃までは“第1期”，その後，表面活動が活発に続いた“第2期”，その後現在に至るまでを“第3期”とすれば“第3期”の特徴は，低いながらも間欠的に続く活動である。地震活動については，特に本巻別章²⁾で論じられている。こゝでは，毎日の放出地震エネルギーの31日間の移動平均（札幌管区气象台による）を第3図に示す。



第3図 毎日の放出地震エネルギーの31日間の
移動平均（札幌管区气象台による）。

“第3期”を通じてゆっくり減少しているが，1979年10月頃からやや加速されている。第4図に北外輪のせり出し速度（NR），おがり山の隆起速度（OY），新山の隆起速度（NM）を示す。いずれも，第3図の放出地震エネルギーとほぼ同じ傾向である。



第4図 北外輪のせり出し(NR)，おがり山の隆起(OY)，新山の隆起(NM)の毎日の速度の月平均値の3ヶ月間の移動平均値

参 考 文 献

- 1) 北海道大学理学部：計器観測による有珠山頂火口原の地殻変動，火山噴火予知連絡会報，11（1978），8-12，12（1978），6-8，13（1978），16-20，14（1979），6-9，15（1979），6-10，16（1979），4-7，17（1980），33-36.
- 2) 北海道大学理学部（1980）：有珠山噴火後群発した地震の震央・震源分布，火山噴火予知連絡会報，18，22-24